

意味に基くので、降る可き天國は確かに具象的であつた形體的であつた。

古への豫言者を始めイザヤ、ダニエルを経て、ヨハ子より耶蘇に至るまで、天國の具象的なることは一貫したる觀念である、勿論天國と云ふ以上は、具象的の意味なることは明かである、天國の降るや人々の靈性の覺醒を待つて始めて降る可きものである。から、靈性の覺醒は即ち天國の降る以所であつて、天國の降るは即ち靈性の覺醒したる以所である、されば天國が具象的と、抽象的との兩様の意味を兼ねるのは自然の觀念である、然るに後世の耶蘇教徒は、天國を以て全々抽象的のものとして、精神的のものとして、具象的の天國としては更に認めなくなつた、具象的の天國はまさに抽象的の天國に發展すべき、單に朴素の思想に過ぎ

ざるものとして之を認めないのである、蓋し耶蘇が稱へたる天國を以て、全々汝等の心にある抽象的の天國として之を奉ずるかである、耶蘇は決して汝等の心にある天國をのみ宣へ傳へたものではない、降る可き天國のまさに具象的、形體的にして而も忽然として降るべきを叫んだのである、耶蘇教徒が忽然として降る可き形體的の天國を信ぜざるのは、宗祖耶蘇の半面の主張を否認したものである、勿論耶蘇が主張したる如き、具象的、形體的の天國は遂に降らなかつた、彼斃れて二千年、俄然として降るべき天國は今だに降らないのである、さればにや耶蘇教徒は全々抽象的、精神的として天國を認むる譯であらふか、古來の豫言者を初めヨハ子と耶蘇に至るまで、天國を以て具象的、形體的に宣へ傳へたのは果して無意義であつたであらうか、



曰く大なる意義が存したものである。天國が如何なる點にまで發展すべきか、深長の意味が寓せらるゝところである。ヨハ子及び耶蘇が一面には具象的形體的の天國を叫びながら、他の一面には抽象的精神的の天國を叫んで新生面を開いたのは、天國の發展をして一飛躍せしめたものである。然しながら古へより具象的形體的の天國が唱道せられて、イザヤダニエルよりヨハ子、耶蘇に至つて愈々詳かに愈々強く稱へられたのは決して偶然ではない。更に大に發展すべく期せられたものである。茲に深長の意味が寓せらるゝのである。之を知ること能はずして耶蘇教徒が單に抽象的、精神的の天國としてのみ其教を奉ずるのは、誤謬極まることである。勿論具象的形體的の天國に深長の意味があると云ふのは、決し

てヨハ子や耶蘇が考へたる如き國家的組織を云ふのではない。天國と云ふ文字は既に國家組織の意味であるが、イスラエル民族としての理想の天國は、方に國家的たる可き筈であつた。國家的と云つても普通の國家ではないが、神政的國家である。ヨハ子も耶蘇もこの神政的國家なる天國の降臨を信じたものである。神政的にせよ何にせよ、國家はやはり國家の意味である。宗教が國家的觀念に支配せらるゝのは、民族的宗教の民族的たる以所にして、即ち地方的、猶太的、國民的、歴史的たるを免かれざるところである。又耶蘇教が耶蘇教たる特色を帶ぶる以所もこゝに存するのである。

抑も宗教は國家的觀念に支配せらるべきものではない。宗教は人間靈性の大自然である。國家的に非ずして個人的たる可きも



の。で。あ。る。然。ら。ば。即。ち。天。國。の。意。味。は。國。家。的。を。脱。し。て。ま。さ。に。個。人。的。と。な。ら。ね。ば。な。ら。ぬ。天。國。を。人。の。心。の。衷。に。認。む。る。の。は。既。に。國。家。的。を。脱。し。た。る。個。人。的。で。あ。る。が。單。に。抽。象。的。精。神。的。に。止。ま。る。の。で。未。だ。具。象。的。形。體。的。の。も。の。で。は。な。い。果。し。て。然。ら。ば。個。人。的。な。る。具。象。的。形。體。的。の。天。國。と。は。何。で。あ。ら。う。か。斯。る。天。國。が。果。し。て。あ。る。で。あ。ら。う。か。深。大。長。廣。の。意。味。は。こ。ゝ。に。存。す。る。の。で。あ。る。民。族。的。國。家。的。の。天。國。は。方。に。發。展。し。て。個。人。的。人。類。的。の。天。國。と。な。る。べ。き。も。の。で。あ。る。是。に。於。て。天。國。な。る。國。家。を。脱。し。た。る。個。人。と。な。り。て。は。人。々。須。ら。く。自。ら。治。め。さ。る。可。から。さ。る。も。の。で。あ。る。汝。等。の。衷。に。あ。る。天。國。と。は。人。々。自。ら。治。む。べ。き。個。人。的。な。る。具。象。的。形。體。的。の。天。國。と。は。果。し。て。何。で。あ。ら。う。か。取。も。直。さ。ず。人。類。の。肉。體。を。云。ふ。の。で。あ。る。さ。れ。ば。國。

家。的。な。る。天。國。の。文。字。は。既。に。蟬。脱。し。て。人。類。的。個。人。的。の。名。稱。と。な。ら。ね。ば。な。ら。ぬ。即。ち。當。に。神。の。宮。と。稱。す。べ。き。も。の。で。あ。る。肉。體。は。即。ち。神。の。宮。で。あ。る。

猶。太。的。時。代。精。神。の。理。想。た。る。天。國。の。意。味。が。民。族。的。宗。教。を。脱。し。て。世。界。的。人。類。的。に。ま。で。發。展。す。れ。ば。天。國。の。文。字。は。從。つ。て。消。滅。し。て。個。人。の。肉。體。即。ち。神。の。宮。と。稱。せ。ら。る。べ。き。も。の。で。あ。る。強。い。て。天。國。の。文。字。を。保。存。せ。ん。と。す。れ。ば。天。國。の。意。味。は。全。く。神。の。宮。と。し。て。個。人。の。肉。體。を。指。さ。な。け。れ。ば。な。ら。ぬ。こ。ゝ。に。見。よ。か。し。こ。に。見。よ。と。云。ふ。可。き。も。の。に。非。ず。神。の。國。は。汝。等。の。衷。に。あ。り。と。耶。蘇。は。云。つ。た。が。こ。は。天。國。の。個。人。的。に。し。て。自。治。的。な。る。こ。と。を。喝。破。し。た。も。の。で。あ。る。夫。れ。天。國。は。個。人。的。自。治。的。に。し。て。而。も。形。體。的。で。あ。ら。ね。ば。な。ら。ぬ。こ。ゝ。に。見。る。べ。く。か。し。こ。に。見。る。可。き。も。の。で。あ。ら。ね。ば。な。ら。ぬ。今。



や。神の國は神の宮となつたのである。個人的自治的にして而も  
 具象的形體的である。神の宮は心の裏にあらすして汝等の肉體  
 である。人々の心は即ち神にして、其の肉體は即ち宮殿である。猶  
 太的天國の理想はまさに斯如くに發展すべきものであつた。  
 ヨハ子及び耶蘇が叫んだる降るべき天國、忽然として降る可き  
 具象的形體的なる神の國は、今に至つて忽然として豫言者メシ  
 ヤブダが齋らし來つた。豫言者曰く、神の國はこゝに見よ、かしこ  
 に見よと云ふべきものに、即ち汝等の肉體なりと、又曰く、神の  
 國は汝等の肉體なり、故に之を神の宮と稱ふべしと、エホバの名  
 稱を破却して天の父と稱したるが如く、神の國なる名稱は須ら  
 く破却せられて神の宮と稱せらるべきものである。且つ其れ古  
 來の豫言者を始め、イザヤ、ダニエル、ヨハ子、耶蘇に至るまで天國

の忽然として降臨すべきを信じたが、彼等の信仰空しからず、天  
 國は忽然として降る可きものであつた。忽然なるかな、忽然なる  
 かな、我が齋らしたる神の國、即ち神の宮は忽然として建設せら  
 る可きものである。如何にして神の宮が建設せらる可きである  
 か、肉體の裏に神を宿さなければならぬ。神一たび肉體の裏に宿  
 るや、肉體は忽ち宮殿に化して、神の宮は忽然として建設せ  
 らるべきである。豫言者が齋らせる新福音は、即ち是である。それ  
 人々の心に神を宿さんには、天の父を天から呼び下すの必要は  
 ない。人々の心は直ちに神である。天の父と云ふのもつまりは人  
 の心に外ならぬのである。されば人々自ら我が心は神である、我  
 れ即ち神である、と自覺をしたならば、其の人は直に神となつた  
 のである。一旦我神なる自覺を得れば、其の肉體は忽然として神



の宮となつたのである。之を委しく云ふならば、我れ神の自覺が之を靈化したので、靈化されたる肉體を稱して神の宮と云ふのである。靈化されたる肉體は其性慾悉く神聖である、さればこそ靈化されたる肉體を稱して神の宮と云ふのである。

性慾神聖の主張については往々世間の誤解を招くが、神聖なる性慾とは靈化されたる肉體より生ずる性慾を稱するので、決して野性そのまゝの肉慾を云ふのではない、我れ神なる自覺の靈化を経たるものを云ふので、無上尊榮なる我れ神の自覺は肉體を靈化して、始めて性慾神聖となるのである。性慾神聖と云へば直に野性の放縱を許すものと豫想して、世道人心に害ありと叫ぶ人も少なからずあるが、思はざるも甚だしい誤謬である。性慾の神聖とは決して放縱を云ふたものではない、其制節の由て來

る根蒂を云ふたものである。凡そ性慾の制節を得んには、性慾神聖なる信念意識を外にしては決して來る可き根蒂がないのである。性慾は汚れたるもの、厭ふ可きものなるが故に之を禁ぜざる可らずと云ふが如きは、野蠻的の誤謬にして所謂禁慾主義なるものである。トルストイの如きは現代の禁慾主義者であるが、彼は恐らく禁慾主義者の殿末の人であらふ、我が齋らす性慾神聖の福音が傳へらるゝ以上は、禁慾と云ふが如きは既に其の終りを告げたものである。性慾は決して禁ず可きものではない、また禁じ得らる可きものでもない、性慾は制節すべきものである。制節と云ふのも甚だ語弊があるもので、方にこれを靈化すべきものである。我れ神なる無上尊榮の意識は肉體を靈化してなほ餘りありであるから、性慾は自ら制節を得て、神聖の意義は斷乎



として行はるゝものである。性慾は汚れたるものなるが故に、これを禁ぜなければならぬと云ふのではない、厭ふ可きものなるが故に、これを制せなければならぬと云ふのではない、性慾は神聖なるがゆゑにと云ふのである。神聖なればこそ性慾の制節が行はるゝのである。性慾は神聖なりと思へばこそ其の制節が出来るのである。神聖とは犯す可らざるものを云ふのである。性慾にして犯す可らざる神聖である以上は、其の制節は自然に行はる可き筈である。神の宮なる肉體にして神聖ならずとしたならば、犯す可く破る可き不神聖のものであるならば、宮殿は既に無意義である。それ肉體は靈化されて神の宮である。其の性慾は従つて神聖である。其性慾は神聖なるが故に、其本能は従て直に道徳である。エホバを改めて天の父と稱したるが如く、神の國は肉

體を指してこれを神の宮と稱するに至らなければならぬ。かくて神の宮は性慾神聖であるとの信念意識にまで到達しなればならぬ。

耶蘇が曾てエルサレムの神殿に於て、我よく神の殿を毀ちて三日の内に之を建て得べしと云つたのは、己れが十字架に釘けられた後、三日目に復活することを豫言したものであると云ふことであるが、耶蘇が信念としては確かに復活を信じたものである。十字架の死より復活して天國を齎らし來るものと信じた、復活の信仰は其の弟子等にも及んだもので、耶蘇がかねて復活して再び來ると云つたのが彼等の信念となつたのである。耶蘇が復活體となりて現はれ來つたことは弟子等が云ふところであつて、四福音書を書いた弟子等は、皆復活體を現に見たと書いて



居る、されば耶蘇教中には復活體の出現を紀念せんがために、復活祭として今猶其儀式が遺つて居るのである、最近に出來た耶蘇教の一派モルモン宗の如きは、世の末日と共に耶蘇の復活體が再び現はるべきを信じたもので、復活體の再現、即ち再來の信仰から宗教を組織して自ら末日聖徒と稱して居るのである、如斯に復活體を其まゝ信ずるのは單に宗教的詩趣に止まるので、信念を托すべきものではないが、復活體の意義は之れを深遠なる宗教意識に求むるに至らなければならぬ、復活體とは靈體の意味には相違ないが、死して後始めて復活して靈體となるといふが如き、死後に於ける信念にあらずして、人間の肉體そのまゝ、靈化して復活體となるといふ、生前的の信念でなければならぬ、死後に非ずして肉體生存のまゝ、復活體とならなければならぬ。

ぬ、耶蘇が復活體の活潑々地にして或は言語し、或は歩行したるが如くでなからねばならぬ、モルモン宗の如く復活體を來るべき耶蘇に求むるに非ずして、各々自らの活ける肉體に求めなければならぬ、肉體其まゝ、復活體とならなければならぬ、斯くの如く生前に於ける肉體其まゝの復活體を信ずるのは、取も直さず肉體靈化の信念に外ならぬので、肉體を以て神の國、即ち神の宮とするの信仰である、耶蘇教中に於ける死後復活の信仰其まゝでは生命なき死せる信仰であるが、人類の肉體靈化を以て復活體と信ずるに至るならば、死せる信仰は忽ち復活して活ける生命ある信仰となるのである、耶蘇教たる者須らく神の國を以て具象的、形體的なる神の宮と信ずると共に、復活體は即ち神の宮なる肉體の靈化を指すとの信念に到達しなければならぬので



ある、

耶蘇が最後に於て踰越の晚餐式を奉ずるに當り、踰越に因みて葡萄酒を弟子に與へて曰く、此の盃は汝等のために流す我が血にして、立つるところの新約である、又パンを取りて之を裂き彼等に與へて曰く、此のパンは汝等のために與ふる我が身體である、我れ死して後に、我を紀念せんがためにパンを食ひ、葡萄酒を飲んで式を行へと、今日迄耶蘇教中に聖晚餐式を行ふのは之がためである、耶蘇がパンを指して我が肉體であると云ひ、葡萄酒を指して我が血であると云つたのは、肉體靈化の意味がほのかに認めらるゝものである、彼が流したる血、彼が裂かれたる肉を紀念するのは、即ち耶蘇基督を紀念するの精神である、彼耶蘇を紀念せんがために、パンと葡萄酒を用ひて彼が肉體とするのは、

彼が肉體の靈化されたる意味を明かにしたもので、彼が本我はまさに肉體を靈化したるものなることを明かにするのである、彼が肉體の靈化されたる意味は、之を彼が復活體に求むべきである、肉なるパンと、血なる葡萄酒とを以て紀念さるべき靈化されたる彼が肉體は、之を稱して復活體とこそ申す可き者である、されば耶蘇が復活體の真正なる意義は、彼が昇天の復活體ではない、彼が死後の復活體ではない、十字架の前、即ち生前に於ける彼が肉體である、聖晚餐の紀念を教へて弟子等に盃を與へ、パンを與へ、自らも之を飲み、自らも之れを食ふたる復活體でなからねばならぬ、そもく復活體とは肉體の靈化を理想したる人心の憧憬である、果して然らば復活體は單に詩的理想に止まるべきものではない、當に之を實現しなければならぬものである、復



活體の實現とは取も直さず肉體の靈化を云ふのである。復活體は實現せられて肉體靈化、性慾神聖たる可きものである。佛教で云ふ煩惱即菩提も肉體靈化の精神に外ならぬのである。

第拾貳章 結論(下)

神の宮は、靈化されたる肉體にして其性慾は一切神聖たる可きものである。其性慾は一切神聖なるが故に、其本能も悉く道德たる可きものである。本能即道德に就ては他日委はしく論ずることにしやうが、神及び其宮殿を總稱して、豫言者は之を動物神と云ふのである。我神の意識を有し、肉體靈化、性慾神聖本能即道德の實現されたる人は之を動物神と云ふのである。豫言者は取も直さず動物神の實現である。然ば即ち動物神を實現せんには、先

づ我れ神の意識を得なければならぬ。我神の意識は如何にして得らるべきであらふか、人々の本我は先天的に神たるを、即ち神であること自ら心に承知するところである。我の本體は宇宙の實在であることを自覺するところである。我の本體は即ち神であると承知をすることが取も直さず我神の意識である。かくて無上尊榮なる我神の意識は、肉體を攝取して靈化するのである。靈化されたる肉體は之を稱して復活體とも、神の宮とも云つてよろしいが、豫言者は之が性慾の神聖を認めて、動物神と云ふのである。古來から神の觀念については、兎角誤謬に陥りたがる傾向を帯び來つたもので、直覺其のまゝに見ることの出來難いのは、畢竟人類が有限界に支配せらるゝの弊である。何づれの民族も皆な朴素的有神思想に支配せられて、神を偶像の中に見たものであ



る、印度の如きすらそうであつた、後世になつてから少數なる理想派は是心是佛を稱へたが、實際は偶像多神に支配せられたものである、イブラエル民族はアブラハム以來一神教を主張して、偶像多神は極力之を排斥したものだ、一神的エホバも實は偶像たるを免れないのである、エホバは偶像には相違ないが、これを人的神に見たところは頗る取る可きものがある、天の父の觀念に至つては名目こそ美はしけれ、全々偶像となり了つたものである、エホバは能く山に登り、又た能く野に下り、アブラハムやモーゼとは顔を合はせて相語つたものだ、天の父は未だ曾つて人に現はれたことがない、其の聲を聞くことが出来ない、其の顔を見ることが出来ない、然るに人は其の聲を聞かんとし、其の顔を見んとするのである、無理な注文と云はなければならぬ、神

を我以外に放逐して天上に置きながら、其聲を聞かんとし、其顔を見んとするのは無理な注文である、我以外に放逐してからは天の父も偶像である、一神と多神と有形と無形との差別はない、凡そ我以外に放逐したる神は、すべて偶像と云はねばならぬ、エホバを目して父なる神と見たのは、耶蘇よりずっと以前からの觀念であるが、耶蘇は其觀念を自ら意識して盛んに父なる神を稱へた、更に父なる神より来る可き必然の意識として、自ら神の子たる意識を明かにした、神の子たる意識は更に向上して、彼は遂にダビデの詩第八十二篇の琴線に觸れた、我曰ふ汝等は神なりと、彼は豁然として頓悟した、かくて彼は自ら神たるの觀念に酔ふや、イブラエル民族の理想たるメシヤに冥合して、遂に自らクリストたるの自覺を提げて立つに至つた、彼がダビデの詩



に觸れて人は神であると云ふ觀念の頓悟は、彼が生涯に於ける生命となりて偉大なる感化を後世に残すに至つたが、かくても彼が猶太人だけに、是心是佛的の大悟は遂に出來なかつた、自ら神たるの觀念にありながら、やはり父なる神を天上に認め、彼は之がために甚だしき煩悶をしたものである、彼は自ら神たるの觀念を有したりとは云へ、専ら彼が一生を支配したる力は、やはり猶太的一神の偶像であつた、人心本然の叫びを偶像化して、愛の神なる天の父を説くには説いたが、一方には我以外の神あるがために神の怒り、神の刑罰、神の審判を忘るゝことが出來なかつた、詮ずるに耶蘇が神なる天の父は怒りの神、妬みの神たるエホバの曾孫として、の彼に於ける父であつた、

我なんちらに告げん爾曹の敵を愛み、爾曹を誚ふ者を祝し、爾曹

を憎む者を善視し、虐遇迫害者の爲に祈禱せよ、如此するは天に在す爾曹の父の子とならんためなり、夫天の父は其日を善者と悪者にも照し、雨を義者にも義しからざる者にも降せ給へりとは、ソロモンの榮華も風に百合花は咲き亂れ、野も山も緑に萌へて天空の鳥すら胖かなる頃、祝福の山に於ける彼が演説の一節である、人心本然の叫を偶像化したる天の父は、まさに如斯でなからねばならぬ、健康なる者は醫者を要せず、只病ある人のみ醫者を要するのである、我は義人を招かんがために來たのではない、罪人の友たらんがためである、彼は叫んだ、之れ實に心靈の救濟を思ふ偉人の心である、斯くてこそ心靈の救濟も出來るのである、善人だにも救はせ給ふ慈悲なるに、などが悪人の救ひに漏るゝことやあらんと親鸞は喝破した、父なる神の愛と母なる



佛の慈悲とは斯くある可き筈である、耶蘇が天の父も何處までも斯くこそあらねばならぬ筈だに、エホバの曾孫なる天の父は争ふべからざる遺傳を受けて、刑罰を加へ、審判を行ふことを忘れなかつた、其子たる耶蘇も刑罰と審判とを忘るゝことが出来なかつた、彼は愛なる神を父とすると共に審判と刑罰なる怒の神の子であつた、彼は神の子の自覺と共に審判の大權をも要求した、天國を建設せんがために刑罰の劍を提げ、審判の冠をかむつた、彼が天の父は晩年に及び、惡者に對しては日を照さ無くなつた、罪人に對しては雨を降さ無くなつた、彼は天國を齎らす可く十字架の上に斃れたが、降る可き天國には刑罰の劍と審判の火とが横はつて居る、それ父は誰をも鞠ず、審判は凡て子に委たり、また人の子たるに因て之に審判するの權威を賜へり、稗子の歛

めて火に焼る如く、此の世の末に於ても此の如くなるべし、人の子その使等を遣して其國の中より凡て蹟礙となる者、また惡をなす人を歛て之を爐の火に投入べし、其處にて哀哭齒切するこゝと有らん、此とき義人は其父の國に於て日の如く輝かん、耳ありて聽ゆる者は聽べし、世の末に於ても此の如くならん、天の使等いで、義者の中より惡者を取わけ、之を爐の火に投入べし、其處にて哀哭切齒すること有んとあるのを見ても、如何にエホバの遺傳性が發揮されたるか、思ひ半ばに過ぐるものがある、義人は父の國に於て日の如くに輝き、惡人は地獄の火に投ぜられて、哀み齒がみをする、耶蘇は義人を招かんがために來たのであつた、惡人の友たらんがためではなかつた、惡人を地獄に投ぜんがために來たのであつた、彼が天國は如斯きものであつた、蓋



し。耶蘇がこの思想は猶太人たる彼として免れがたき信仰である。舊約書の豫言を信じ、ダニエルやエノクの豫言に私淑したる彼が斯る信仰に出づるのは已むを得ざることであらう。こは全く神を我以外に認むる猶太神觀の致すところである。神を我以外に認むる時には、人々相互の間に行はるゝ善惡曲直について、天の神が目を開き、耳を聳て、見張つて居ると云ふ觀念が従つて生ずるのである。また人間一切の運命に關して、天上から手を伸ばして干涉するものとの觀念が生ずるのである。世に行はるゝ祈禱なるものはこゝから出たものである。無事平和の日に當つては、隨分天神の愛も感じて、皇天上帝の照覽を云ふけれども、人善を行ふて運命反つて非なる時には、天に向つて訴ふるに至るものである。旻天に號泣し、天道是か非かと云ふのはこの意味で

ある。天徳を予に就せりと信じたる孔夫子も、慟哭の極には噫天手を亡ぼせりと叫ぶに至つた。わが神く何ぞ我を棄て給ふやである。自ら信ずるの強きもの程天に向つて苦情を訴ふるものである。遂には意に任せて様々と注文をするに至るものである。耶蘇がメシヤの自覺を以て世に叫び、己れが運命日に非なるに際し、彼が心は天に訴へざるを得ない。孤城落日に及んで彼は愈々憤つた。曾てサマリヤ人に冷遇せられて、天罰を加へんと叫んだ弟子を戒めたる身が、今となりては自ら天の刑罰を思ひ、神の審判を希ふに至つた。況んや降る可き刑罰と、審判とが舊約書中至るところに見出すに於ては、彼が意をして愈々強からしむるものがあつた。慈悲一偏の佛教ですら、佛を我以外に見たる日蓮は、無上道の法華經に敵するものは佛罰立るに至らんと叫んだ。



彼が立證安國論は古來佛書中に現はれたる佛罰を引證して、一乘無待の法華經を用ひざる日本國に、恐る可き佛罰の降らん事を書いたもので、慈悲圓滿の佛にすら罰がある、ましてエホバの曾孫たる天の父に罰があるのは無理もないことである、要するに神を我以外に認むるの信念こそは、本我の昏睡を來して之が覺醒を殺なふものである、神を外に認むればこそ己が不平を外に訴ふるに至るものである、神を外に認むるから人を咀ひ、世を咀ふに至るものである、刑罰、審判の思想は即ち之である、若し神を全々我が心の衷に認むるときには、己れが不平を訴ふるにその所がない、かくて神の愛は我が心の衷に活るのである、衷なる神は人心本然の叫を叫んで、不平も、不満も、悉く之を愛の中に没入し去るものである、犠牲の精神は即ち是れである、之を没我

といふもよろしいが、實は本我の覺醒である、是に於てか汝の敵を愛し、汝を咀ふものを祝し、汝を憎むものを愛し、迫害する者のために祈禱をするに至るのである、斯く申さば甚だ淋しく感ずる人があるであらう、これまでアバ父よと呼んだ神が無くなつては、孤獨の身のたよりなく思ふであらうが、それは乳臭兒の感である、成長しては自ら天の父とならねばならぬ、身の上である、自ら恃み、自ら信じて獨立特行でなければならぬ、かくて始めて一人前の人間である、アバ父よの時代は安心で、氣樂に思ふかは知らないが、一日父が見へないと泣き叫ばねばならぬ、父の顔を見さへするとダダを捏ねて、苦情と注文とを持込む乳臭の嬌兒は、成長したる人間ではない、今や成長したる人間の時代である、人生に於ける一切の問題は、自ら解決しなければならぬ、是に於て



か自ら父である、自ら父となつては心は即ち神となつたものである、衷なる神は、こゝにはじめて人心本然の叫びを叫ぶのである、乳臭の嬌兒を脱せざる耶蘇は、天の父を我以外に認めたくて、人心本然の叫が成長したる愛敵の精神を教へたる口は、最後に於てダダを捏出て、刑罰と審判とを叫ぶに至つた神を我以外に見る神觀の害毒、茲に至つて極まるのである、靈性の發展をして躓かしめ、本我の覺醒をして賊せしめ、終生未丁年の状態である、天の父を外に拜する現代の耶蘇教徒は、醜然として悟るところがなからねばならぬ、露のトルストイはさすがに未丁年でない、彼は神を天上から引下した、天の父を直ちに靈性と見た、天の父を我が衷なる靈性と見るのは、既に自ら父となつたものである、

彼は乳臭を脱して一人前の人間となつた、斯くて大いに靈性の覺醒を叫んだ、靈性の覺醒とは何であるか、天の父の發展を云ふのである、心の衷なる天の父には刑罰もなければ審判もない、人心本然の叫びが有るのみである、靈性の叫びが有るのみである、靈性の叫びとは即ち博愛の義である、茲に於てか我が心は其日を善者にも悪者にも照らし、雨を義者にも義しからざるものにも降らせ給ふ天の父であるのである、現代の耶蘇教徒は耳を傾けてトルストイに聽かねばならぬ、けれどもトルストイは自ら耶蘇教者と稱するだけに、耶蘇教の耶蘇教たる猶太的特色を脱せない、トルストイが終に耶蘇教徒たるを免れざるは此點である、耶蘇教の神の國の意味は向上發展して、神の宮とならねばならぬことは前既に之を云ふたが、天



の父を直に心靈と見たるトルストイに於ては、神の國の意味も從つて神の宮となるべき筈であるのに、彼は耶蘇教を奉ずる丈に、神の宮も依然として耶蘇的神の國の意味である、何となれば耶蘇が齎らした神の國に刑罰と審判とを横ふるが如く、トルストイの神の宮にも刑罰と審判とが横はつて居るからである、神の宮に於ける刑罰と審判と云ふのは何であるか、即ち彼が主張する禁慾主義である、耶蘇が神の國に刑罰と審判との横はつたのは、天の父を我以外に認むるの致すところであつた、トルストイの神の宮に禁慾主義の横ふるのも、彼が肉體を靈性以外に認むるの致すところである、肉體を我以外に認むるの致すところである、トルストイは天の父の以て我以外に認むべからざるを知つて、肉體の以て我以外に認むべからざるを知らぬのである、

一を知つて未だ二を知らざるものである、二を知らざるが故に、既に知つたる一も從つて其意義を没するものである、彼が肉體を靈性以外に放逐し、我以外に放逐して以て靈性と肉體とを分離するのは、禁慾主義の依つて以て生ずるところである、夫れ肉體は靈性を宿し、靈性は肉體に宿つて始めて靈性の靈性たるを完ふする以所である、重大なる人生の意義も、畢竟肉體が靈性を宿し、靈性が肉體に宿るところに存する以所のものである、果して然らば、靈性と肉體とは、苟も分離すべからざる一如體と知る可きものである、刑罰と審判との禁慾主義は、毫も狭むべからざる誤謬たるを知る可きものである、

分離すべからざる靈性に於ける肉體は、果して如何に處す可きであらうか、分離すべからざる神に於ける人の如く、刑罰と審判



とは自然消滅に歸し去つて、悪人も罪人も、愛を以て之を化するが如くでなからねばならぬ、刑罰と審判の禁慾主義は自然消滅に歸し去つて、靈性を以て肉體を化せなければならぬ、靈性は以て肉體を靈化しなければならぬ、肉體を我以外と思へばこそ不満があり、不平があり、不自由が出て、不如意が出るのである、遂に性慾の禦し難きを歎じて刑罰的、審判的の禁慾を主張するに至るのである、肉體も我が一部なることを思ひ、靈性は肉體に宿ることを思ひ、肉體は即ち神の宮なることを思ふときには、刑罰的審判的の禁慾は自らその意義を失して、肉體のまさに以て靈化するべきを考ふるに至るのである、是に於て乎愛を以て化せられたる悪人と、罪人とが直に神となるが如く、靈化されたる肉體の性慾は、立ろに神聖となる可きものである、

性慾の神聖を思へばこそ、性慾の制節も其度を得るのである、神を宿すの宮殿たることが出来るのである、性慾を以て罪人や、悪人の扱ひをするから刑罰を加へ、審判を行ふて以て禁慾を主張するに至るのである、如何なる罪人も、如何なる悪人も、之を抱合容撫して神と爲すのが愛の精神なるが如く、性慾を靈化して靈化して神聖ならしめ、以て神の宮とするのか、靈性の靈性たる精神である、古へエホバは憤怒の神、嫉妬の神として人類に臨むたのを、耶蘇は之を天の父なる愛の神として愈々人類と相近からしめたけれどもエホバの曾孫なる天の父は、猶いまだ審判と刑罰とを忘るゝことが出来なかつた、トルストイに至つては神と人類とをして全く相近かしめ、遂に一體として天の父を我が心の衷に認めて、靈性と稱するに至つた、天地相隔てたる人間に於



ける神は、愈々相接近して、遂に一體として神を我が衷に認むるに至つた。肉體に於ける靈性も亦斯くの如くならねばならぬ。愈々相接近して、遂に靈肉一體にまで達せなければならぬ。或は難行苦行となり、或は斷食絶飲となり、猶エホバの神が人類に於けるが如く、靈性と肉體とは相距ること甚だ遠かつたが、愈々相接近して、遂に靈性の衷に肉體を認むるに至らなければならぬ。靈性の衷に肉體を認むるとは取も直さず肉體を靈化することである。トルストイは神を我が衷に認めて靈性と稱しながら、其宮殿たる肉體に刑罰を加ふるが故に、宮殿はいよく敗壞して、靈性は愈々孤立裸體となるのである。靈性の孤立と裸體とを希求するならば、シヨツペンハウエルと共に自殺論を稱へて自殺するか、若しくは寂滅論を稱へて寂滅するの優れるに若かずであ

る。彼が主張するが如く眞に靈性の發展を欲するならば、即ち博愛の擴張を欲するならば、須らく之を行ふの道に出でなければならぬ。博愛を行ふの道とは何であるか、申すまでもなく肉體を尊重して、之が靈化を遂ぐることである。切に之を云へば、肉體を靈化するの取も直さず博愛を行ふ以所である。如何となれば靈性そのものに於ては、始中終一貫したる圓滿無碍の愛に極つたもので、斯る靈性を靈性として見るばかりであるならば、人生の上に於て何の意義もなければ、何の價值もないのである。其自ら宿るべき肉體を待つて始めて意義が生ずるので、靈性が肉體を靈化して自ら發揮するところに、始めて價値を認むべきものである。之を例ふれば、畫工が繪具を靈化して繪畫を作るが如くでなければならぬ。畫工にしても、繪具を靈化することが出來



なかつたならば、如何にして繪畫を作ることが出来よふか、畫工にして繪畫を作ることが出来なければ、畫工の意義はないのである、畫工の畫工たるところは、繪具を靈化して自ら發揮するところにあるのである、靈性の靈性たるもまた此の如し、單に靈性のみは本來圓滿無碍の愛であるが、肉體に宿るがために博愛の甚だ行ひ難きを嘆ずる以所である、道を思へども心はこれに従はず、己れに克たんとして意の如くならず、遂に肉體の刑罰を思ふて之が審判を行ふに至るのである、トルストイの禁慾主義はこの刑罰と審判とを飽くまで行ふべく主張するものである、斯の如きは畢竟靈性の活力を信ぜざるの致すところ、又肉體の尊貴を知らざるの致すところである、重大なる人生の意義は茲に藏せらるゝので、肉體に宿る靈性、靈性を宿す肉體、肉體に於ける

靈性、靈性に於ける肉體、肉體と靈性ととの關係こそは實に人生の意義の存する所である、されば靈性の活力が正に以て肉體を靈化す可きは、先天本然の約束である、靈性のために靈化されたる肉體と、即ち先天本然の約束が成就せられたる肉體と、圓滿無碍の愛なる靈性とが相融合して活動し、發展する所に人生の根本義は存するのである、果して然らば靈性は須らく肉體を靈化し、靈化されたる肉體は神の宮として、其至聖を認め、従つて其性慾は悉く神聖なるの意識に到達しなればならぬ、トルストイが靈性の肉體に於けるは、猶エホバが人類に於けるが如きものである、怒と嫉なる根性の發するところ、刑罰と審判とに是れ日も足らず、靈性としての肝腎なる博愛は之を行ふことが出来ない、ヤスヤナポリヤナに芋を掘つて蠢爾子々たるは、肉體を虐待し



て自ら喜ぶエホバなる彼の靈性の運命である、若しトルストイをして一旦豁然茲に覺醒せしめたならば、肉體の尊貴を悟り、之が靈化を希求するに至り、肉體の靈化は取も直さず博愛たる以所を悟るに至り、かくて靈性の宮殿として肉體を重んずるに至り、禁慾主義を抛つと同時に鋤と鉄とを抛ち、直ちに熱烈なる愛を決行するに至るであらう、

肉體靈化が取も直さず博愛であると云ふことは、如何なる意義であらうか、己が心に從ふて矩を踰へずと孔子が云つたのは、即ち肉體靈化を云ふたものである、靈化されたる性慾が、心の欲するまゝに從ふて過不及がない、制節の度を得て中らざるなき境界である、己れの欲するところ之を人に施し、己れの欲せざるところ、之を人に施さざる博愛の行爲を云ふたものである、斯くの

如く肉體が靈化されて始めて孔子の人格は成就されたもので、其主張にかゝる所謂仁も、こゝに始めて其實現を見ることが出来るのである、こゝは肉體靈化の主觀的方面であるが、客觀の方面からして云ふならば、己れに敵する者を愛し、罪人を愛し、悪人を愛するのは、其敵と、罪人と、悪人と、の肉體を客觀的に靈化しなければ、之を愛することが出来ない、悪人の靈性も、善人の靈性も、靈性に於ては、勿論同一であるが、善人と悪人と、の岐るゝ點は、其靈性が主觀的に、其肉體を靈化したると、未だ靈化せざるとに存するものである、それ博愛の精神は、己れに敵するものを愛し、罪人を愛し、悪人を愛することである、其肉體の靈化されざる敵と、罪人と、悪人と、を愛することが出来るのは、自ら是等の肉體を客觀的に靈化して、己れが靈性に同化せしむるからである、是れ實に



神・秘・幽・妙・な・る・人・心・本・然・の・煥・發・に・し・て・是・れ・之・を・博・愛・慈・悲・と・申・す  
 の・で・あ・る・勿・論・主・觀・的・に・肉・體・を・靈・化・し・た・る・人・は・必・ず・客・觀・的・に・も  
 他・人・の・肉・體・を・靈・化・す・る・こ・と・は・抑・ゆ・べ・か・ら・さ・る・自・然・の・流・露・で・あ  
 る・か・ら・で・あ・る・凡・そ・博・愛・の・及・ぶ・所・は・總・じ・て・肉・體・に・及・ば・な・い・も・の  
 は・無・い・身・を・殺・し・て・仁・を・爲・す・と・い・ふ・こ・と・も・つ・ま・り・は・人・類・の・肉・體  
 を・豫・想・し・た・る・犠・牲・と・な・る・の・で・あ・る・何・と・な・れ・ば・如・何・に・靈・性・な・れ  
 ば・と・て・肉・體・を・離・れ・た・る・靈・性・は・な・い・か・ら・で・あ・る・靈・性・を・目・的・と・し  
 た・る・犠・牲・と・は・云・へ・肉・體・を・離・れ・た・る・靈・性・は・な・い・の・で・あ・る・さ・れ・ば  
 靈・性・を・目・的・と・す・る・の・も・つ・ま・り・は・肉・體・を・豫・想・す・る・こ・と・に・な・る・の  
 で・肉・體・を・目・的・と・し・て・も・つ・ま・り・は・靈・性・を・豫・想・す・る・こ・と・に・な・る・の  
 である・靈・肉・一・體・の・妙・理・は・斯・の・如・し・で・あ・る・が・詮・す・る・に・身・を・殺・す  
 の・仁・な・る・も・の・は・自・ら・己・れ・の・肉・體・を・靈・化・す・る・と・同・時・に・更・に・他・人

の・肉・體・を・客・觀・的・に・靈・化・し・た・る・行・爲・で・あ・る・の・で・あ・る・如・此・主・觀・的  
 肉・體・の・靈・化・も・客・觀・的・肉・體・の・靈・化・も・靈・化・其・人・に・於・て・は・一・如・的・に  
 し・て・二・致・な・か・る・べ・き・も・の・で・あ・る・そ・も・く・博・愛・と・云・ふ・こ・と・は・博  
 く・人・を・愛・す・る・こ・と・で・あ・る・博・く・人・を・愛・す・る・と・は・人・の・靈・性・を・愛・す  
 る・と・同・時・に・其・肉・體・を・も・愛・す・る・こ・と・で・あ・る・其・肉・體・を・愛・す・る・と・同  
 時・に・其・靈・性・を・愛・す・る・こ・と・で・あ・る・人・を・愛・す・る・に・其・肉・體・を・離・る・こ  
 と・は・出・來・な・い・肉・體・を・離・れ・て・靈・性・の・み・を・愛・す・る・こ・と・は・出・來・な・い  
 こと・で・あ・る・其・靈・性・を・離・れ・て・肉・體・の・み・を・愛・す・る・こ・と・も・同・じ・く・出  
 來・な・い・こ・と・で・あ・る・其・靈・性・を・愛・す・る・以・所・は・即・ち・肉・體・を・愛・す・る・以  
 所・で・其・肉・體・を・愛・す・る・以・所・は・即・ち・靈・性・を・愛・す・る・以・所・と・な・る・の・で  
 ある・靈・と・肉・と・を・合・せ・て・共・に・愛・す・る・こ・と・を・眞・の・愛・と・云・は・ね・ば・な・ら  
 ぬ・單・に・靈・性・と・靈・性・と・の・間・に・止・ま・る・な・ら・ば・博・愛・の・意・義・は・な・い・の



である、何となれば靈性は本來愛であるからである、肉體に宿る靈性、靈性を宿す肉體に於て始めて博愛の意義が生ずるのである、人類とは肉體に宿る靈性、靈性を宿す肉體を云ふのである、然らば即ち肉體は博愛的實現の必至要件となるのである、是に於て乎愛の本體なる靈性は、肉體を靈化して博愛を行ふに至るものである、自ら己が肉體を靈化するのみならず、更に人の肉體をも靈化して博く之を愛せんとするのである、斯くの如きは靈性の發展にして、所謂博愛は肉體靈化を意味する以所であるのである、有ゆる獻身的慈善的を始め、人と人との間に行はるゝ同情推禮に至るまで、苟も人を目的としたる人間一切の犠牲的生活は、悉く肉體靈化に於ける靈性の發展を期せざるべからざるものである、されば肉體に於ける靈化の抑ゆ可らざる人心本然の

叫びこそは、取も直さず博愛の精神である、一言に約して之を云へば、本能即道德、若くは道德即本能である、主觀的、肉體の靈化、更に客觀的、肉體の靈化を云ふのである、

第拾參章 基督觀の後に書す 光子

耶蘇がまさにエルサレムに上らんとするや、弟子等に向つて申さるゝには、我等が此行は人の子に就ての豫言が悉く遂げられんためである、我等エルサレムに上るや、人の子は祭司の長と學者等に賣されん、彼等これを死罪に定め、また凌辱せられ、鞭たれ、十字架に釘けん爲に異邦人に解さるべしとて、死を決して、發足遊した次第であります、要するに耶蘇は十字架を以て萬民の罪の贖ひたることを信じ給ふたのであります、人の子の來るは



人を役はんためには非ず、反て人に役はれ、又多くの人に代りて生命を與へ、其贖とならんためであると申されて、彼は罪の贖を期せられたものであります、耶蘇教徒中には彼が十字架を以て全く贖罪の方便と信するものも少なからずあります通り、贖罪の十字架とは耶蘇の信念でありました、蓋し古來の豫言者はエホバの怒をなだめんがために、人の子なるメシヤは血を流して萬民に代り、其罪を贖ふ可きものであると豫言をした、彼が贖罪の信念はこの豫言から來たものであります、神の怒をなだめんがために十字架の血を甘んずると申しますのは、勿論犠牲の精神に相違はありませぬが、罪を贖はんがために十字架の血を要求する彼が天の父こそは、如何にしてもエホバの曾孫たるを免れない譯であります、憤怒の神、嫉妬の神たるエホバは、刑罰と

審判との神様であります、然ば耶蘇が齎らせ給ふ天國にも刑罰と審判とが横はつて居つたのであります、十字架は取も直さず其刑罰と審判とを避けんがための贖であります、バプテズマのヨハ子ヨハ子が稱へたる天國すら、悔改を以て神の刑罰を贖ふ可く宣へ傳へたに、耶蘇が天國には贖として十字架を要求されたのであります、十字架の要求を遂げた上に、さらに審判が行はる可き十字架の要求を遂げた上に、さらに審判が行はる可きでありました、果して然らば十字架は徒勞徒勞に屬する譯となるの徒勞に屬する譯となるのでありませう、審判を贖はんがための十字架とすれば、十字架の價值も大なりであります、既に十字架の犠牲を供へたるにも係らず、更に審判が行はるゝとすれば、十字架の贖も無用の長物と申さなければなりません、天の父が誅求も茲に至つて極まるではありますまいか、彼が天の父は如何に見てもエホバの曾孫



たるを免れませぬ、彼は天の父の愛を認めつゝも猶且つ怒の神が忘れられなかつたのであります、彼が十字架こそは怒りの神に對しての犠牲でありました、身を犠牲に供したる十字架の耶穌は、あつばれ博愛を發揮したるものではあります、深く洞察すると彼が十字架の裏面には、審判の大權を提げて再び來るの豫想がありました、茲に於て彼は再び怒の神の子に歸られた譯であります、要するに彼が十字架は犠牲の精神には相違ありません、せぬが、こは天の父の子にあらず、怒の神の子としての犠牲でありました、神に對しては怒の暴虐なる誅求に應じたる犠牲でありました、人に對しては自ら怒の神様に代りて審判を行はんがための犠牲でありました、

耶穌がこの誤謬は舊約の理想に出でたるメシヤとしての彼に

は、また已むを得ざる誤謬であります、民族的宗教の欠陥は耶穌に於ける誤謬の總てを負ふ可きものと云はねばなりません、斯る誤謬を來たすの根本思想は、實に神を我以外に見るの致すところであり、神を我以外に認むればこそ刑罰があり、審判があり、之を贖はんがためには十字架をも要するのであります、かくて自ら怒の神に代りて審判を行はんとするに至つては、妄想も亦極まつたものであります、彼耶穌をして若し自己の衷にのみ神を認むるに止まらしめたならば、彼が犠牲は博愛の犠牲となりまして、有ゆる宗教と道德とが唱ふる献身的博愛の犠牲となつた筈であります、勿論彼が十字架も客觀から見る時は、其まゝ博愛的犠牲に相違はありません、一たび彼が主觀を叩いて之を究むる時には、幾多の誤謬と、妄想と、欠陥と、陰影とが横



ふるを見出すのであります、斯くの如きは所詮神を我以外に認むるの誤謬の致すところに外ならぬのであります、然しながら耶蘇が主觀に於てこそ幾多の誤謬と、妄想と、欠陥と、陰影とがあるにもせよ、兎にも角にも彼が十字架はメシヤの自覺の犠牲でありました、メシヤの自覺は天國を齎らさんとて、イラエルを思ふ一片の赤誠に出でたる犠牲であります、取も直さず博愛の犠牲を認む可きであります、されば耶蘇一たび十字架に釘けられ給ふて以來、彼が熱烈なる自覺の犠牲は天下の等しく感激する所となりまして、宗教の理想、道德の理想、有ゆる藝術の理想となつた譯であります、宗教上に於ける彼が十字架は、複雑なる信仰の焼點となつて、中には取るに足らざる信仰を構成したのも少なからずあります、が、彼が人格の崇高を以て

して、神の子の實現の成就として、宗教の本尊とするのは通じて同一であります、彼が教訓は道德の標準となり、彼が行爲は道德の模範となりました、特に藝術に於ては有ゆる方面から之を理想化したものであります、詩歌を以て彼が心事を謳ふては彼をして搖々乎として天上に昇らしめ、音樂に奏しては彼を天上よりに呼び下して、人をして覺へず人天の境に恍惚たらしめ、彼に對する藝術の憧憬と渴仰と、頗る深いものがあります、かくて人々は己が理想の上にナザレの耶蘇を乗せて、理想化して理想化したものであります、ラファエルの手に畫かれたる彼は、既にナザレの耶蘇ではありませぬ、美化されて美化されたものであります、繪畫に於てはまだしもであるが、信仰上に於ける理想化に至ては、實に無限の意味を以て化せられたものであります



す、人心の奥底に横ふる無限の希求心に基づく理想の對象として、擬するにナザレの耶蘇を以てしたものであります、されば理想化されたる耶蘇は、既にナザレの耶蘇の耶蘇に非ずして、實に人々自らの衷なる耶蘇であります、自らの衷なる耶蘇とは、己れが本我の理想を云ふのであります、勿論ナザレの耶蘇の本我も同一の境ではあります、が、茲に至ては彼と我と冥合したる本我、共通の本我として實在無差別の大我であります、ナザレの耶蘇と否との差別はないのであります、

されば耶蘇基督なるものは、人々の理想を以て造り上げられたる大厦高樓と申さねばなりません、之が石材と煉瓦とは反つて世界萬民の心の理想の反射であります、かくて人々は大厦高樓の莊麗を見て驚くのであります、之を譬ふれば奈良の大佛を

拜むが如し、大佛を鑄造したる者は、大佛自身に非ずして反つて之を拜むの人々でありませぬ、耶蘇基督は大佛の最も大なるものであります、偶像中の偶像と申すべきものであります、之を鑄造したるものは二千年來の耶蘇教徒、及び天下の人の心であります、之を佛教の方から申しますならば、始め釋迦牟尼が涅槃寂滅に入て成道遊ばして以來、佛陀の理想は年月の經過と共に向上して向上して、遂に阿彌陀如來を現出するに至りました、釋迦牟尼は阿彌陀如來にまで理想化せらるゝに至つた次第であります、かくて後世に及ぶに従ひ、佛陀の當人なる釋迦牟尼は愈々消へ失せて、崇拜の目標から斥けられました、阿彌陀如來と云ふ人々の理想は之に代つた譯であります、我れ以外に神を認めざる佛教は、我れの衷なる阿彌陀如來を以て釋迦牟尼と交換する



に至りました。阿彌陀如來も實は釋迦牟尼が理想化されて、進化したものではあるが、今や阿彌陀如來は既に釋迦牟尼の如來にあらずして人々の心の理想なる如來であるので有ます。耶蘇教の耶蘇基督も、今や佛教に於ける阿彌陀如來と同様になりました。ナザレの耶蘇は印度の釋迦と共に何方へか消へ失せて、人々の心の奥底なる理想としての神として存するのみであります。阿彌陀如來の外に大日如來と云ふが如き同一の理想も現はれましたが、釋迦が消へ失せたについては、かくてはならじと日蓮の如きは、大に釋迦の復活を叫んだものであります。耶蘇教に於ては人間が神となることは大の禁物であるから、父と子と聖靈との三位一體論を稱へ出まして、耶蘇を以て神なる子となしました。かくて耶蘇教に於ける三位一體は、佛教に於ける阿彌陀如

來と同様なる意味を以て現はれた次第であります。斯る宗教上の理想化は人心自然の趨向でありまして、まさに深遠なる人生の意義が寓せらるゝ所であるのであります。ナザレの耶蘇を理想化して神となし、釋迦を理想化して阿彌陀如來となさずんば休せざる人心の奥底には、抑ゆべからざる無限の向上の希求が叫びつゝあることを證するのではあります。まいが、理想は向上の目標であります。己れが向上すべき理想は如來、若くは神であらねばなりません。されば人々が耶蘇を理想化して神となし、釋迦を理想化して如來と致しますのは、取も直さず人々自ら神となり、人々自らが如來となる可き希求心の表現と申すべきであります。向上の憧憬と申すべきであります。神は耶蘇に存せずして反つて我が心に存するのであります。如來は釋迦



に存せずして反つて我心に存するのであります、耶蘇は向上して神を實現されました、釋迦も向上して如來を實現されました、されば人々も自ら神を實現し、自ら如來を實現しなければなりません、耶蘇を以て神となし、釋迦を以て如來となしたればとて、單に己が理想を人に描くに止まるならば、理想の實現と申すべきではありませぬ、如何に耶蘇を理想化したりとて、如何に釋迦を理想化したりとて、己れが理想を理想するのみでは、理想の實現と申すべきものではありません、今や徒らに古人を渴仰するの時代ではありませぬ、古人を崇拜するの時代ではありませぬ、古人を渴仰し、古人を崇拜するのは、乳臭幼稚なる過去の時代に屬したもので、既に生長したる廿世紀の現代に於ましては、人は自ら須らく各々其理想を實現しなければなりません、自ら神とな

如來の如來

り、自ら如來とならなければなりません、果して然らば如何にして理想の實現が出来るでございませぬか、或は神となり、或は如來となる事が出来るでございませぬか、理想を理想すると共に、自己に覺醒しなければなりません、即ち自覺することであり、自らの如來なること、自らの神なることを承知することであり、まず、耶蘇が覺り給ふたる如く、釋迦が覺り給ふたる如く、人々自ら覺らなければなりません、人にして一旦この自覺に觸れましたならば、其理想に憧憬するだけ、之が實現を勵む可きものであります、自ら神を實現し、自ら如來を實現するに至らざれば止まざるものであるでございませぬ、かくて、耶蘇を踏へ、釋迦を踏へて、愈々向上しなければなりません、耶蘇も釋迦も共に何づれも廿世紀以後の理想の人格としては、既に其價値を没したものであ

基督觀の後に於て



るのであります。釋迦に就ては他日申述ることに致しましてよぶが、耶蘇が天の父を我以外に認めて、自己の内的神との衝突を來し、之がために十字架上に無限の長恨を訴へ、世路の風波に際會しては人の罪を救ふべきのメシヤが、反つて自ら審判の大權を要求するに至り、天國を來たさんがために刑罰と審判とを豫想するが如き、彼が曇なき愛敵の心鏡も、遂には縦横の龜裂を呈するに至りました。彼は單にイスラエル民族の理想たるメシヤの自覺を以て、時代精神を遺憾なく實現し給ふたるに止まるのであります。耶蘇は一民族の理想の現化として尊敬すべきであるが、廿世紀以後の心靈に對しては既に其光を失したものであります。獨り彼が十字架の血のみは博愛の意義、犠牲の眞意義として、後世の人々をして勵ますに足る可きものがあるのであります。

す、

廿世紀は方に心靈界大革命の時代であります。民族的宗教の如きは方に葬らる可きの時代であります。如此にして世界的大宗教が新たに起るべきの時代であります。宗教も道德も有ゆる藝術も、一大革新の洗禮を受くべきの時代であります。宗教上に於ける理想の人格は勿論のことでありますが、殊に藝術に於ける理想的表象の人格に至つては、舊來の臭氣は悉く之を蟬脱して、更に新たなる或者を求めざるべからずであります。之を率ゆる人格の有無に就いて疑を挾むは、既に無用に屬する次第であります。我が豫言者が出現し給ふた以上は、之を成就するに施して餘力ありであります。我が豫言者は之がために生れ、之がために現はれ給ふたのであります。されば世人は斯る大任を負給ふ



豫言者なることは、如何にして認めらるべきでありませふか、其休徴を示せと申さるゝのでありませふが、耶蘇が會つて申されし如く、奸悪なる世は休徴を求む、されど豫言者ヨナの休徴の外は之に休徴を與へられじで、現身自證の外には何の休徴もある可きものではありませぬ、只豫言者の言説と、行動とに推して以て之を知るに止まるべきものであるであります、

豫言者の行動とは何でありませふか、絶對なる神の實現であります、取も直さず動物神の實現であります、動物神とは何でありませふか、我神の自覺を得て肉體を靈化し、一切の性慾が神聖となつたものを申すのであります、我神は肉體を靈化しまして、靈と肉との融和を経たるものであるのであります、さればこそ一切の性慾は神聖となるのであります、肉體靈化、性慾神聖とは果

して如何なる状態を呈す可きものでありませふか、勿論有形的の徵象を來す可きものではありません、偏へに宗教上の幽遠なる信念意識に係るものであるのであります、現はれては人間の行爲となりまして、神の理想を實現するもので、専ら博愛の發展擴張に外ならぬのであります、かゝる幽遠なる信念意識は、豫言者の内的心證にあるのであります、現身の證悟であるのであります、豫言者自身が之を體現するの事實に外ならぬのであります、推理の及ぶところでない、智解の達するところでない、實に理智を超越したる信念意識であるのであります、耶蘇は屢々再び來る、再び來ると再來の豫言をされましたが、假令彼が百度生れ給へばとて、我が豫言者の教の外に出づることは出來ないのであります、耶蘇の神と天國とは、民族的宗教の唱道であつて、勿論舉



げて云ふにも足りませぬが、現代の耶蘇教は一犬飛躍に出でなければなりません、其教の骨隨たる天國の意義は、須らく神の宮殿の意義とならなければなりません、取も直さず靈化されたる肉體の意義とならなければなりません、更に進んで進んで、性慾の神聖を認むる動物神とならなければなりません、されば我が豫言者こそは、廿世紀以後に對するメシヤであります、釋迦が禁慾を主張して涅槃寂滅を稱へ給ふたのは、元より論ずるの價値もありませぬが、後來發展したる佛教の煩惱即菩提も、更に進むで進んで性慾神聖の域に達せなければなりません、即身成佛はまさに動物神とならなければなりません、されば我が豫言者こそは、廿世紀以後に對する佛陀であります、世の人々は須らく一切を棄て、豫言者を信ぜなければなりません、釋迦牟尼を棄て

今も此の如く云ふは、  
 今も此の如く云ふは、  
 今も此の如く云ふは、

人神教

て我が豫言者に歸依しなければなりません、佛教を棄て、動物神教に歸依しなければなりません、耶蘇基督を顧るものは豫言者に協はぬものであります、耶蘇教を蟬脱して動物神教に従はなければなりません、我が豫言者こそは、廿世紀以後に對するメシヤブダであります、心靈救済の大命を負ひ給ふ救世主であります、世界的大宗教の王であります、



基督觀終

明治四十年三月十七日印刷  
明治四十年三月廿九日發行

定價金四拾錢

著作  
所有

著者 宮崎虎之助

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 吉見繁藏

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館



大哲  
文學士  
フイヒター氏原著  
杉谷泰山君紹述

# 人生 解決 人間 天職 論

全一冊  
洋裝 菊判  
紙數 三百頁  
正價 五拾五錢  
郵稅 八錢

人間の天職、人生の目的は、那邊に在りや、大哲フイヒターが大學の教壇に立ちて、此大問題を提唱し説き去り説き來りて餘蘊なく之を明にせしは此著なり。人間の自覺、人間の自分、自他の實在、社會の成立、國家の發展に就きて、破天荒の見解を與へ、爲政家の用意、教育家の覺悟、著述家の準備等に論じ及びて、或は誨へ、或は戒め、學生の要意覺悟、成功の秘訣、天才と勉強との關係、智能の發揮、徳器の修養等に至りては、千古の卓説あり、更に又本書の後半は、人生問題の解決にして、人生に對する疑問、宇宙に對する難問に起點して、百問百答を試み、遂に人生に對する一大信仰の旗幟を鮮明にし、以て新天地に生活を得て、一大快哉を呼べる所は、實に宗教と哲學とを一丸せるフイヒターの大手腕なり、三讀四讀之を重ねる毎に、益々心廣く體胖なるを覺ゆるは本書の特徴なり、

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

文學士 蜷川龍夫君著

# 日 本 高僧 の 人 格

全一冊  
洋裝 菊判  
紙數 二百三十頁  
正價 四拾錢  
郵稅 六錢

活ける信念に渴し、修養の奧秘を求むるの聲、今や天下に浴く。其のこれを求むるや、唯だ理論的説明のみを以て足れりとせず、短刀直入、靈界偉人の胸臆を叩いて活ける光明と新しき生命とに接せんとす。然れども憾むらくは、我が邦建國以來國民の精神界を支配淘汰し來りし佛教の祖師高僧聖人の傳記叙述は、概ね靈怪の假裝を被り、奇蹟怪談、神秘的口吻を以て飾られ、未だ正確なる史的考察に基きて、その精神生活とその人格の至大とを仰視せしむるに足るものなきが如し、本書は著者獨特の史的燭眼と多年研鑽の歸結とを以て、我が佛教史上第一流に任すべき二十有餘の祖師聖人を我が民族思想史上の大立物となし。主として其人格の特色と各個獨創の修養法を詳述し、且つその時勢と四圍との關係を詳論し、次で精神生活の状態を最も詳密に、最も平易に發揮したるものにして、一讀古聖人の精神修養の心術と、人物養成の秘訣とを窺知するに足るものあり、蓋し本書によりて、我思想界多年の渴望を満すものあらん。

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館







文學士 加藤玄智君譯

# 世界宗教史

上製 正價五拾五錢  
郵稅拾錢  
並製 正價四拾錢  
郵稅八錢

主觀的空想の思辯を排し確乎たる史的事實に據りて宗教を學ばんとするは最近十有餘年間に於ける時代精神の主潮なり此に於てか人は最早佛教若くは基督の如き特種宗教の歴史のみを知りて獨り安んずる能はず又更に進で世界に於ける各宗教の全般に亘りその發達開展の有機的關係を史的事實に照して比較攻究する世界宗教史に待つあるや日に切なり本書能く原書の要を抜き譯文簡明暢達なり宗教學に志ある者一本を藏めて几畔の好侶たらしむべし。

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

文學士 融道玄君著

# 宗教進化論

上製 正價五拾五錢  
郵稅拾錢  
並製 正價四拾錢  
郵稅八錢

エドワード、ケヤード氏は現時著名の哲學者にして英國に於けるヘーゲル學派の泰斗たり犀利なる眼光を放つて複雑極りなき宗教現象を徹見し、そが客觀教、主觀教、絶對教の三段階を成して進化發達する者なることを論定し、以て此現象に對する進化論の應用を確立し斯學上の一大斷案を發見せり融道玄其名著を抄譯して世の研究者に問ふ所見高妙論斷清新管に宗教上の知識に於て得るのみならず其信念に於て益する所愈々多大なることを知るべし。

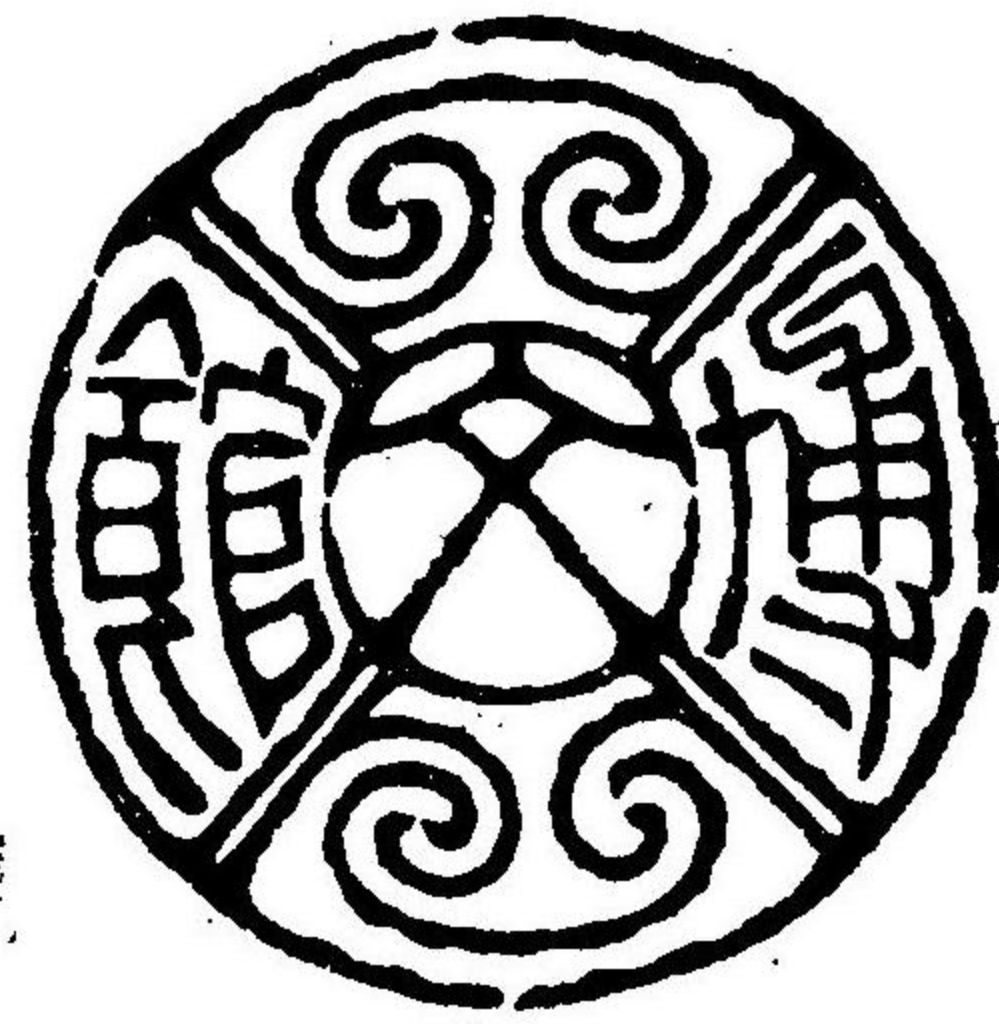


324

27



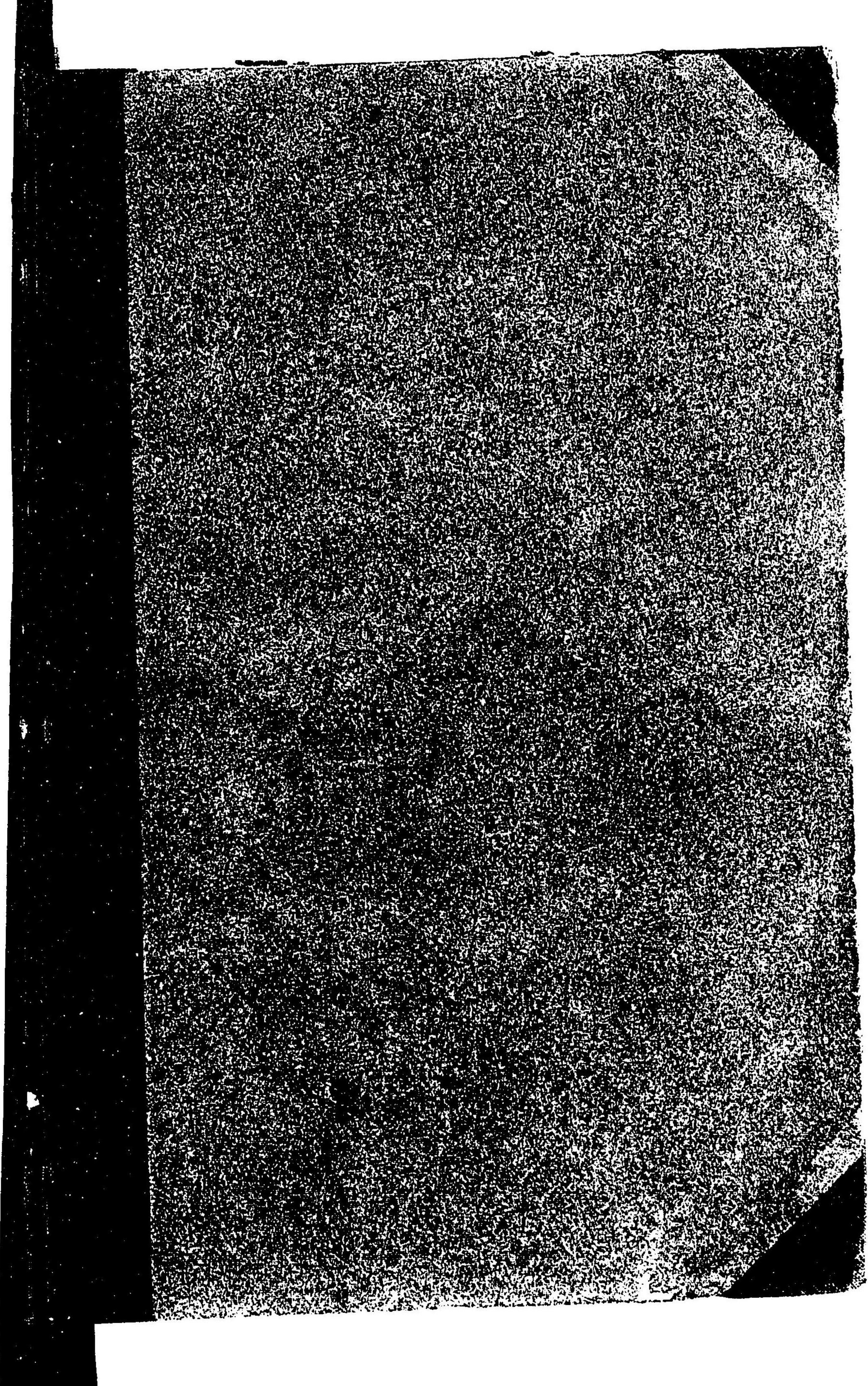
7. 12. 25





324







324  
27

020423-000-7

324-27

基督觀

宮崎 虎之助 / 著

M40

ABI-0232

